―寝取られ伊吹の異種姦妊娠―
罠に掛けられた少女が孕んだのは
異形の仔だった・・・。
DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止
基本CG:19枚
本編225枚+テキストなし54枚
総テキスト量 2万字の大ボリューム！

「この一刀、伊吹の嶺（たかね）にかけてっ！」

凛とした掛け声とともに伊吹の振り下ろした刀が
量産型セイレーンを両断した。

剣戟と同時に放たれた魚雷は一直線に航跡を描き、
雷光一閃、別の量産型の横っ腹を吹き飛ばして
大きな水しぶきを跳ね上げた。

重巡洋艦・伊吹。

雷撃戦を得意とする重桜陣営の中でも、

一際魚雷攻撃に特化した艦船である。

重巡本来の砲撃戦能力の高さと相まって、

彼女は他の追従を許さない強さを誇っていた。

今日もまた彼女の獅子奮迅の活躍が艦隊に勝利をもたらした。

コンコン、とノックの音が響く。

中からの返事を待って、伊吹は静かに執務室の扉を開いた。

少し緊張した面持ちで部屋の中へと歩みをすすめる。

窓際に据え付けられた机の前では指揮官が
難しそうな顔をして書類に目を通していた。
が、伊吹が側にくると顔を上げてにこやかに微笑みかけた。
「やあ、おかえり。ご苦労だったね。
本日の戦闘でも大活躍だったじゃないか。」

指揮官の温かな視線を受けて、伊吹の顔が一瞬ほころぶ。
けれどもすぐにキリッとした表情に戻ると、
取り繕うように言葉を発した。

「あ、主殿のおかげです。主殿の的確な指示があればこそ、
伊吹は力を振るえます……。
それに、主殿に喜んでもらえるなら
伊吹はもっとがんばれますから。」

「ははっ、それは心強いな。
オレも、母港の誰よりも伊吹を頼りにしてるよ。
戦闘でも秘書艦としても、伊吹が一番一生懸命だからな。」

「そんな……あ、ありがとうございます、主殿……。」

話しながら、伊吹の頬に徐々に紅が差していく。

顔を赤らめ、嬉しそうに気恥ずかしそうに話すその姿は、

まさに「恋する少女」のそれだった。

一方の指揮官の態度には下心は一切見られず、
ただただ信頼できる仲間として彼女に接していた。
今の言葉にしても他意なく素直に褒めているだけで、
伊吹にはそれが少し残念だった。

《主殿に求められれば、伊吹はいつでも……》

話し続ける指揮官の横顔を熱っぽく眺めながら、
伊吹はぼーっと妄想にふける。
恋する少女の妄想は留まることなくモワモワと膨らんでいく。
いつか指揮官と過ごしてみたい、夢の数々。

『……それでこの書類を今夜中に片付けてしまいたいんだ。伊吹、付き合ってくれるか？」

ぼんやり夢想の世界を漂っていた少女は、突如名前を呼ばれたことで現実へと連れ戻された。

「も、もちろんです。伊吹は主殿の秘書艦ですから……！」

慌てて応えながら、指揮官の様子をうかがう。不審に思っている様子はなさそうだ。

ほっと一息をついて、伊吹は再び指揮官の横顔を眺めた。

（主殿と二人……こんな日々が、ずっと続けばいいのに……。）

「指揮官くん、今少しいい？」
「指揮官さま、ご相談したいことが……。」
「指揮官、委託が終わったです。」
母港にいると多くの艦船が指揮官を慕っている様子を
たびたび目にする。
ある艦船は少女のように頬を染めながら、
別の艦船は誘惑するような視線を送りながら、
指揮官に各々の好意を寄せている。
（主殿……また他の子と楽しそうにお話ししている……。）

指揮官は誰にでも別け隔てなく接するタイプで、
みんなと公平に付き合うように努めているらしかった。
その証拠に、彼はどの艦船ともケッコンしていない。
けれどもこういう光景をみるたび、
伊吹は心がざわついてしまうのだった。
敬愛する指揮官が他の子たちにとられてしまうんじゃないか、
という漠然とした不安感。

誰よりも指揮官にとっての特別でありたいと
願うからこそ抱く感情だった。
けれど実は伊吹には、
指揮官から好意を受けている自信が一つだけあった。

（伊吹が母港に来たその日から、
主殿は伊吹を常に秘書艦に…。
それだけ伊吹を特別に思ってくれているはず…。）

もっとも、奥手な彼女には指揮官の気持ちを確かめるすべはなく、
指揮官の一挙手一投足に悶々とする日々を送るだけ。

指揮官の特別でいたい。
指揮官の役に立てるなら
他の艦船にはできないことでもしてあげたい。

……できることなら、
指揮官の初めてのケッコン相手になりたい。

そんな想いだけが伊吹の中でどんどん大きく膨らんでいった。

指揮官の特別でいたい。
指揮官の役に立てるなら
他の艦船にはできないことでもしてあげたい。

……できることなら、
指揮官の初めてのケッコン相手になりたい。

そんな想いだけが伊吹の中でどんどん大きく膨らんでいった。

指揮官の特別でいたい。
指揮官の役に立てるなら
他の艦船にはできないことでもしてあげたい。

……できることなら、
指揮官の初めてのケッコン相手になりたい。

そんな想いだけが伊吹の中でどん大きく膨らんでいった。

指揮官の特別でいたい。
指揮官の役に立てるなら
他の艦船にはできないことでもしてあげたい。

……できることなら、
指揮官の初めてのケッコン相手になりたい。

そんな想いだけが伊吹の中でどんどん大きく膨らんでいった。

転機は突然訪れた。

「……。」

「主殿……。」

机の前で無言のまま項垂れる指揮官。

そこにいつもの笑顔はなく、

重苦しい空気が辺りを満たしている。

その側では伊吹が心配そうな面持ちで指揮官を見つめていた。

机の上には一枚の紙

――僻地への転属命令を記した辞令――が置かれていた。

しかも内容は輸送任務。

華々しい戦果を持つ指揮官に下されたとは、

にわかに信じがたい命令であった。

「こんなの……おかしいです。」

「主殿は誰よりも努力していて……
戦果だってたくさん上げています。
先日だって勲章をいただいて……。
それなのに、後方での輸送任務だなんて。
主殿ほどの有能な指揮官が前線から離れてしまったら
勝てる戦にすら勝てなくなってしまいます！」

珍しく強い口調で伊吹がいう。

あまりに理不尽な内容に、彼女は怒っていた。
指揮官はその言葉を黙って聞いていたが、
やがて重い口を開いた。
「伊吹、ありがとう。
秘書艦として、事務にも戦闘にも関わってくれている伊吹に
そんな風に言ってもらえてオレも嬉しいよ。
けどな、どうしようもないんだ。
これは司令部からの正式な辞令だから。
やりきれない気持ちは確かにあるけど、
軍の中でそんな個人の希望を押し通すわけにはいかない。
なに、司令部にも考えがあってのことだ。
命令には従うよ。」

空元気で弱々しく伊吹に微笑みかける指揮官。
その顔を見て、伊吹はキュッと胸を締め付けられる思いがした。
僻地に飛ばされるだけじゃない。
輸送任務となれば伊吹たち艦船を
指揮する立場ではなくなってしまう。
つまり、指揮官にはもう会うことすら
ままならなくなってしまうのだ。
そうなったら、伊吹は胸に秘めた思いをどうしたらいいのだろう？

（主殿は命令を受け入れるつもり…。
ならば、秘書艦である伊吹が主殿に代わり、
どうにかしてみせます！）

「それで私のところに？」

眼前の男の問いかけに、伊吹はコクリとうなずいた。

どうにかすると言っても伊吹にできることはそう多くない。

戦闘以外となれば尚更である。

その中でかろうじて彼女が思いついたのは、

指揮官が「上官殿」と呼ぶ男のことだった。

秘書艦をしているときに何度か見たことがあるのこの男は、

立派な階級章をつけ、いつも落ち着いた口ぶりと態度を崩さず、

いかにも組織を束ねる偉い人間という風だった。

この男なら人事にも融通が効くかもしれない。

そう考えての訪問だった。

「ふん。あいつも案外臆病者だな。
自ら直訴するでもなく、手持ちの艦船を通して伝えてくるとは。」
「主殿は関係ありません！
これは……伊吹が勝手に……。」
「ほう！では君の指揮官はこのことは知らないのかね？」
「主殿は命令に従うつもりです。
でも、主殿は優秀な指揮官です！
主殿の指揮のおかげで母港の皆どれだけ助かっているか……。
主殿がいなくなってしまったら、
この母港にとって大きな損失です！
だから伊吹は命令の撤回をお願いしたくて……。」

「ああ、君の指揮官の有能っぷりは私も聞いているよ。
ただ……あまり『若くて』有能なのも困りものでね。
彼を妬む声も多いんだ。
……ここだけの話、今回の左遷はそういうことなのさ。」

男は椅子から立ち上がると、
伊吹の横を素通りしながら独り言のようにそう言った。

理不尽な理由に、
伊吹はぎゅっと下唇を噛んだ。

（主殿は立派に仕事をこなしているだけなのに……。）

「だが君が私に相談してくれて実によかった。
私の立場なら……
君の指揮官の左遷の話、なかったことにすることができる。」

思いがけない男の言葉に、
ぱっと伊吹の顔が明るくなった。

「えっ…！そ、それでは！」

「ただし」

突如、背後から肩に男のがっしりした両手が置かれ、

伊吹は怯んだ。

「組織で一度決まったことをひっくり返すには

相応の根回しが必要だ。

時間も手間もかかる。タダで、とはいかんなあ。」

じっとりと嘗め回すような目つきで伊吹を見下ろす男。

その不快な視線をまともに受けて、

伊吹はごくりと喉を鳴らした。

「い、伊吹にできることなら……
なんでもいたします。」
「ほうほう。それはいい心がけだ。」
男の顔が、ぐいっと近づいてくる。
耳元に男の荒い息遣いが迫り、
伊吹は言いようのない恐怖に包まれた。

「それでは、君には今日から毎晩、私の部屋に来てもらおう。
もちろん君の指揮官には内緒で、だ。
幸い、彼は何も知らんのだろう？
では何があっても君と私だけの秘密としておけば
他所に漏れる心配がない……。
君にとっても都合がよいのではないかね？」

「秘密……主殿に知られては困るような……？
一体、伊吹に何をさせるつもりですか？」

要領を得ない様子の伊吹に、
男はやれやれという風の顔をした。

「まるで生娘のようなことを言うじゃないか。
君の指揮官はなにも教えてくれなかったのかね？
男と女が密会するとなればやることなど決まっているだろう。」
「えっ？……あっ、や、やだっ……！」

伊吹の胸元に男の手が伸び、
ぴっちりと張り付いた布地をずらして、
形の整った乳房を露わにした。

今まで男性に見せたことのなかった柔肌を無遠慮にさらされ、
驚きと羞恥が伊吹の顔を覆う。

身体の前でキチッと結ばれていた両手は
男の手を遮るべく一瞬動いたが、
そのまま中途半端な位置で所在なさげに固まってしまった。
自分の抵抗がせっかくのチャンスを
台無しにしてしまうことを恐れた故だった。

「その初々しい反応、
君の指揮官は本当に手を出さなかったのか。
これほど懐いているというのに、
律儀というか、生真面目というか……。
こんな立派なものを持っているんだ。
私にしてみれば楽しまぬ道理はないのだがね。」

男の大きな堅い手が、
思うにまかせて伊吹のおっぱいを揉みしだく。
その柔らかさを満喫するように、
握ったりこねたり好き放題に動き回る。

伊吹は顔を真っ赤にし、
目には涙を浮かべながらその辱めに無言で耐えた。

（主殿に触られたことも……
見せたことすらないのに、
ほとんど初対面の殿方にこんなこと……。）

（でも、でも伊吹がこの辱めに耐えれば、
主殿とお別れせずに済む……
主殿の悲しむ顔を見ることもなくなる……。
伊吹は、主殿の一番の秘書艦……
だから、主殿のためなら、伊吹は……。）

ぎこちなく振り向いて、伊吹は男と目を合わせた。

「しょ、承知しました。
貴方様が伊吹をお望みなのでしたら、
伊吹は貴方様に従います。
ですから、どうか主殿のことを……
よろしくお願いします……。」

伊吹は男に毅然とした態度で臨もうとしていたが、
その声の震えを止めることができなかった。

潤んだ目に溜まった涙は伊吹の意思に反して溢れ出し
紅に染まった頬に涙の筋を描いていく。
伊吹が気丈に振る舞おうとすればするほど、
彼女の心のつらさが際立つのだった。
この様子に男はえらく満足したようだった。
「よし、契約成立だ。君の指揮官のことは任せたまえ。
代わりに君の身は私が預かった。
我々の関係を君の指揮官に気取られぬようにな。」
こうして伊吹は、指揮官に秘密ができた。

潤んだ目に溜まった涙は伊吹の意思に反して溢れ出し
紅に染まった頬に涙の筋を描いていく。
伊吹が気丈に振る舞おうとすればするほど、
彼女の心のつらさが際立つのだった。
この様子に男はえらく満足したようだった。

「よし、契約成立だ。君の指揮官のことは任せたまえ。
代わりに君の身は私が預かった。
我々の関係を君の指揮官に気取られぬようにな。」

こうして伊吹は、指揮官に秘密ができた。

潤んだ目に溜まった涙は伊吹の意思に反して溢れ出し
紅に染まった頬に涙の筋を描いていく。
伊吹が気丈に振る舞おうとすればするほど、
彼女の心のつらさが際立つのだった。

この様子に男はえらく満足したようだった。

「よし、契約成立だ。君の指揮官のことは任せたまえ。
代わりに君の身は私が預かった。
我々の関係を君の指揮官に気取られぬようにな。」

こうして伊吹は、指揮官に秘密ができた。

潤んだ目に溜まった涙は伊吹の意思に反して溢れ出し
紅に染まった頬に涙の筋を描いていく。
伊吹が気丈に振る舞おうとすればするほど、
彼女の心のつらさが際立つのだった。

この様子に男はえらく満足したようだった。

「よし、契約成立だ。君の指揮官のことは任せたまえ。
代わりに君の身は私が預かった。
我々の関係を君の指揮官に気取られぬようにな。」

こうして伊吹は、指揮官に秘密ができた。

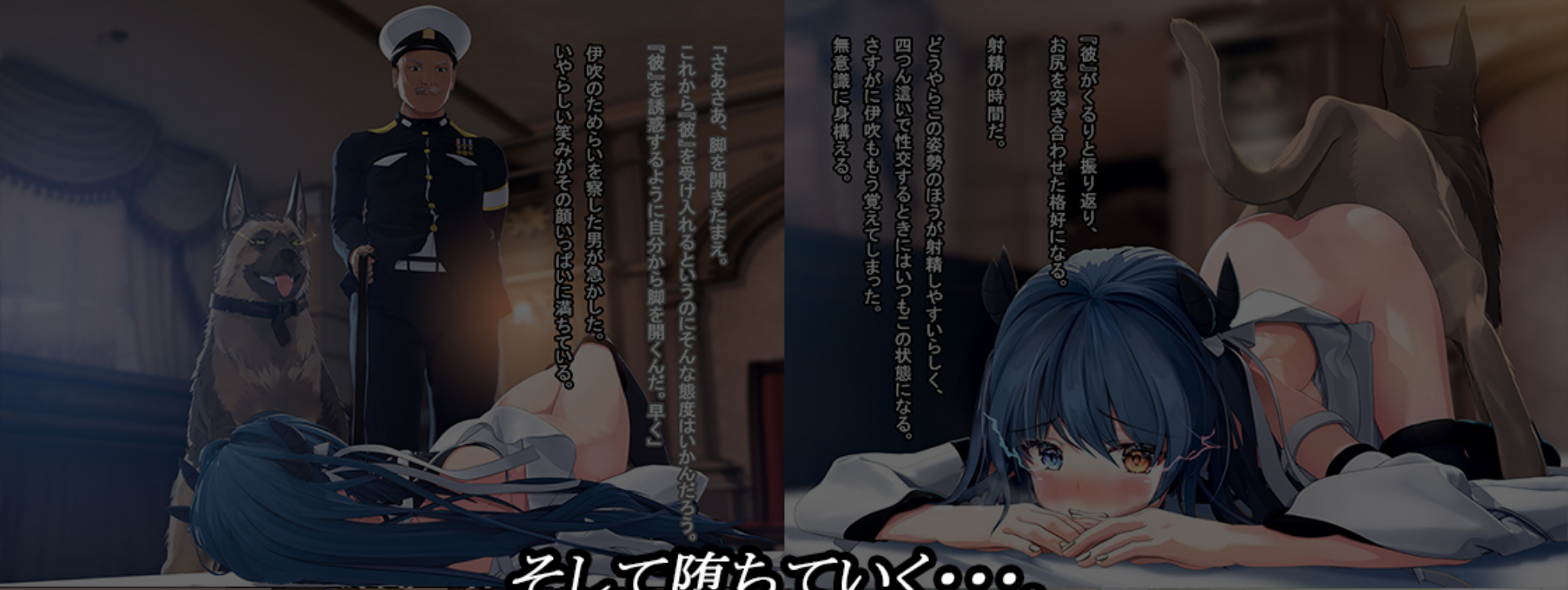
重巡洋艦・伊吹。
雷撃戦を得意とする重桜陣営の中でも、
一際魚雷攻撃に特化した艦船である。
重巡本来の砲撃戦能力の高さと相まって、
彼女は他の追従を許さない強さを誇っていた。
今日もまた彼女の獅子奮迅の活躍が艦隊に勝利をもたらした。

清く気高き少女は、

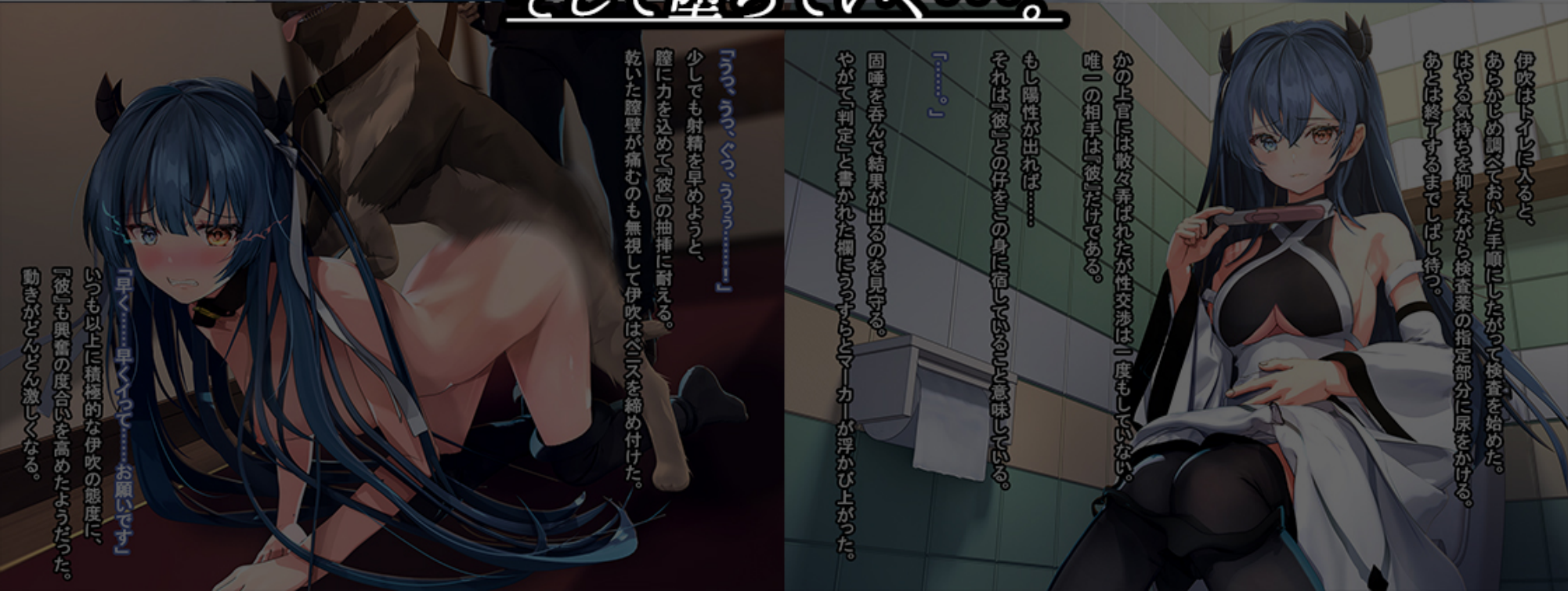
「指揮官くん、今少しいい？」
「指揮官さま、ご相談したいことが……。」
「指揮官、委託が終わったです。」
母港にいると多くの艦船が指揮官を慕っている様子を
たびたび目にする。
ある艦船は少女のように頬を染めながら、
別の艦船は誘惑するような視線を送りながら、
指揮官に各々の好意を寄せている。
（主殿……また他の子と楽しそうにお話ししている……。）

一方の指揮官の態度には下心は一切見られず、
ただただ信頼できる仲間として彼女に接していた。
今の言葉にしても他意なく素直に褒めているだけで、
伊吹にはそれが少し残念だった。
（主殿に求められれば、伊吹はいつでも……）

「そろそろ君にも私のイチモツをしごいてもらいたくてね。」
その日、伊吹がベッドに寝そべるやいなや、男はそう言って男根を伊吹の目の前に晒した。
〈こ、これが殿方の……！？〉
目を丸くしてゴクリと息を飲む伊吹。
初めて見る男性器は独特の形をしていて異界の生物のように感じられた。
ジュブ……とパンツに染み込んでいた愛液が滲み出す感触がして、伊吹はハッとした。
「あ、あの、これは……。」
「君の身体は実に敏感だからな。私の視線だけでこんなにも興奮していたわけだ。今日はこちらを味見させてもらうとしよう。」
想い人のために理不尽を受け入れ、
「まるで生娘のようなことを言うじゃないか。君の指揮官はなにも教えてくれなかったのかね？男と女が密会するとなればやることなど決まっているだろう。」
「えっ？……あっ、や、やだっ……！」
伊吹の胸元に男の手が伸び、ぴっちりと張り付いた布地をずらして、形の整った乳房を露わにした。
今まで男性に見せたことのなかった柔肌を無遠慮にさらされ、驚きと羞恥が伊吹の顔を覆う。
ぐちょり、とした感覚に、伊吹は声を振り絞って叫んだ。
「いや、いやです！そこは、本当に……だめなんですっ！」
ガチャガチャと手首の拘束具がむなしく音をたてる。
今まで誰も、伊吹本人でさえも触れたことのない秘所に男の指が入り込んでいく。
大事な場所を無遠慮に触れられて伊吹の心は羞恥の炎で燃え上がった。


「さあさあ、脚を開きたまえ。
これから『彼』を受け入れるというのにそんな態度はいかんだろう。
『彼』を誘惑するように自分から脚を開くんだ。早く」
伊吹のためらいを察した男が急かした。
いやらしい笑みがその顔いっぱいに満ちている。
『彼』がくるりと振り返り、
お尻を突き合わせた格好になる。
射精の時間だ。
どうやらこの姿勢のほうが射精しやすいらしく、
四つん這いで性交するときにはいつもこの状態になる。
さすがに伊吹ももう覚えてしまった。
無意識に身構える。

そして堕ちていく…。


伊吹はトイレに入ると、
あらかじめ調べておいた手順にしたがって検査を始めた。
はやる気持ちを抑えながら検査薬の指定部分に尿をかける。
あとは終了するまでしばし待つ。
かの上官には散々弄ばれたが性交渉は一度もしていない。
唯一の相手は『彼』だけである。
もし陽性が出れば……
それは『彼』との仔をこの身に宿していること意味している。
「……。」
固唾を呑んで結果が出るのを見守る。
やがて「判定」と書かれた欄にうっすらとマーカーが浮かび上がった。
「うっ、うっ、ぐっ、うぅぅ……」
少しでも射精を早めようと、
膣に力を込めて『彼』の抽挿に耐える。
乾いた膣壁が痛むのも無視して伊吹はペニスを締め付けた。
「早く……早くイって……お願いです」
いつも以上に積極的な伊吹の態度に、
『彼』も興奮の度合いを高めたようだった。
動きがどんどん激しくなる。